

早稲田大学学位審査論文
博士（人間科学）
概要書

幼児の靴履き行動における
スキル発達の生態学に関する横断研究

A Cross-Sectional Study of the Ecology of Skill Development
in Young Children's Learning to Put on Shoes

2019年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

甲賀 崇史

KOHGA, Takashi

研究指導担当教員：根ヶ山 光一 教授

「文化を着服した存在(Bruner, 1971)」である人間にとって、靴を履くという行動は、人類の環境適応の視点から特別な意味が付与されている。これまで、幼児の靴履き行動は、主に基本的な生活習慣の枠組みで扱われてきた。しかし、従来の研究は、子どもが自立する時期や大人の指導技法に着目したものであり、靴履き行動がどのように発達するのか、という視点はもたれていない。本研究は、生態学的な視点から Bruner と Connolly らのスキル発達理論を拡張した研究枠組みに基づいて、幼児期における靴履き行動の発達的变化の一端を明らかにしたものである。

第1章では、スキル発達理論の史的レビューが黎明期、創成期、確立期、発展期の4つに分けて論じられた。スキル発達理論は、認知革命と米国教育改革の、同時代的な変革の中で萌芽した。また、情報処理アプローチが適用され、スキルが系列順序のあるプログラムとみなされた。その際、サブルーティンとよばれる、プログラムを構成する基礎的単位が、階層的に構成されることでスキルが発達すると考えた。さらに、システム論が導入され、スキルをマクロ水準とミクロ水準の2水準から捉える研究枠組みが提案された。以上のスキル発達理論の史的レビューを踏まえて、マクロ-ミクロ水準の構造に環境要因を取り入れる必要性を述べ、生態学的に拡張されたスキル発達理論を独自に作成し、本研究の研究枠組みとした。

第2章では、靴履き行動の姿勢と四肢動作の発達的变化を検討した。3、4、5歳児クラスの子どもを対象として、靴履き行動のマクロ水準「足を靴に押し込む」時点における、ミクロ水準「姿勢」「四肢動作」の発達的变化が検討された。その結果、3歳児では座り姿勢の割合が高いのに対して、4歳児と5歳児は3歳児に比し座り姿勢の割合が減少し、代わりに掴み立ち姿勢および立ち姿勢の割合が増加することが明らかにされた。四肢動作では、座り姿勢の上肢動作は床接触あるいは靴接触動作から空間保持に、下肢動作は下肢挙上動作から下腿外開き動作あるいは膝立て動作へと発達的に変化することが示唆された。掴み立ち及び立ち姿勢の上下肢動作は、床押し付け動作から前傾動作、そして挙上動作へと発達的に変化することが示唆された。

第3章では、靴履き行動の保育者-子ども間相互作用の発達的变化を検討した。0、1、2歳児クラスの子どもを対象として、靴履き行動のマクロ水準「靴と足を近づける」時点における、ミクロ水準「四肢動作」と「人的環境」の発

達的变化が検討された。また保育者の援助行動が分析され、人的環境による制約の一端が調査された。その結果、17ヶ月の子どもから観察された下肢の投げ出し動作が原初的サブルーティンとして特定された。また、子どもの下肢の投げ出し動作の出現に伴い、保育者による子どもの足首を掴み上げる動作が減少し、代わりに両手を使い靴の履き口を広げる動作が増加することが示された。さらに、保育者の位置取りが、子どもの月齢の増加に伴い背後あるいは抱き抱えから対面あるいは側面に変化することが明らかにされた。

第4章では、段差があるテラスにおける靴履き行動の発達的变化を検討した。1歳児～5歳児クラスの子どもの対象として、マクロ水準「靴と足を近づける」及び「足を靴に押し込む」のミクロ水準「四肢動作」と「物的環境」の制約が検討された。物的環境は、テラス面と地面ならびに両面の間にある27cmの段差に着目した。その結果、はじめはテラス面で足を浮かせて靴を履くが、2歳児になると一旦靴をテラスから地面に落として拾いあげ、足を浮かせたまま押し込む動作が観察された。また、3歳児を中心に靴をテラスの床に押し付けて、面の摩擦を利用し足を押し込む動作がみられた。4歳児と5歳児では、一旦靴を地面に落として拾いあげ、靴をテラスの床に押し付けて履く動作が観察された。さらに、4歳児と5歳児では、靴を地面に落とし、そのまま足を下ろして靴に近づけ、前傾し手で靴に足を押し込んで履く動作がみられた。

終章では、第2章から第4章で得られた知見を総覧し、幼児期の靴履き行動の発達の意味が二つの側面から考察された。一つは、子どもの靴履き行動が、身体を介した直接制約から靴などを介した間接制約に変化する、多層的制約に導かれて発達する側面である。もう一つは、子どもが靴を履く主体として、安定性を確保する系、直立性を回復する系を核として、そこに社会的規範を反映する系を織り交ぜながら発達する側面である。これらの系の統合に向けた発達的变化は、子どもの効率性や柔軟性、予期性、志向性などを含む過程と考えられる。結論として、幼児期の靴履き行動は、この二面性により発達していることが論じられた。

引用文献

Bruner, J. S. (1971). *The Relevance of Education*. New York: W. W. Norton.